

東北地方太平洋沖地震ルポ

「津波にすべて壊された」



北海道住宅新聞

2011年
4月5日
北海道住宅新聞社
〒001-0029 札幌市北区北29条西4-2-1-201
電話 011-736-9811
発行人 白井 康永
発行日 毎月 5・15・25日
購読料 3,150円/月(送料込)

ピックアップ



震災の爪跡と復興の兆し

東北地方太平洋沖地震で被災地の住宅はどうなったのか。(1～5面)

まちが一瞬で消えた。3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は1万名を超える犠牲者を出し、いまなお被害の余波がつかめないほど大規模な自然災害となった。この地震で人命を守る器である住宅はどうなったのか。この目で確かめるため、地震発生から2週間が経った現地に足を運んだ。(水越)

【3月24日(木) 岩手県盛岡市】 構造的被害は少ない

高断熱は室温低下を防いだ

前日の夜に苦小牧から臨時便のフェリーで青森に入った。青森県内では八戸港が被災したものの青森港は普段と変わらず、青森市内も普段と変わった様子はない。コンビニも開いているし、ガソリンスタンドも並ばずに給油している。「これなら岩手や宮城も生活環境はかなり改善されているのでは」と思ったが甘かった。

東北自動車道で岩手に入り盛岡インターを出て国道を少し走ると、路肩に車の行列ができていた。それは数百m先にあるガソリンスタンドまで続いている。他のスタンドも同じ状況か、在庫切れのため臨時休業の看板が出されたまま。立ち寄ったコンビニの店内は

命運を分けた境界線

津波が届いた住宅は押し寄せてきたガレキに押しつぶされ、津波が届かなかった後方の住宅は何事もなかったかのように建っていた(陸前高田市)



長土居さんの自宅では電気温水器の配管の継ぎ手から水漏れがあった(赤丸部分)。床に水が染みた跡が残っている

食料品の棚の多くが空いたままで、パンは1人2つまでしか買えない。売るものがないため午後3時には店を閉めるという。物流は依然滞ったまままだ。

ただ、盛岡市内の住宅は、外から見る限り損傷を受けている様子は感じられない。盛岡の震度は6弱と決して揺れは小さくないはずなのに。

盛岡では、最初にエネルギーアドバイザーとして

て様々な住宅関連の研究会で活動している長土居正弘さんの自宅を訪ねた。長土居さんは地震当日、スイスに滞在中だったが、現地でも頻りに地震のニュースが流れていたという。

「盛岡は震度6弱だが、見る限り構造的な被害が少ない。わが家は食器や棚に置いていたものが落ちたりしたほか、電気温水器の配管の継ぎ手からの水漏れや灯油タンクのアンカーのズレなどが起こった。ただ、Q値が1・2Wと断熱性能が高かったため、電気が1日半止まって暖房が使えなくなっても食堂で18℃ほど室温があった」(長土居さん)。

深刻なガソリン不足

現場や打ち合わせに行けない

続いて長土居さんの紹介で住宅会社(D・LIFE社)社長の畠山康裕さんと、設計事務所・オオツカヨウ建築設計代表の塚陽さんにお会いした。畠山さんは「建てて頂いたお客様に電話で状況を確認したが、特に被害

は、電話が通じず設備工事業者に連絡できなかったにもかかわらず、業者自ら様子を見に来て直してくれただ。」「これは、ユーザーに願うのは、ユーザーにエネルギーショックや災害に強い住宅を建ててもらいたいということ。Q値1W以下で、自立運転モードのある太陽光発電などあれば、災害にはかなり強い住宅になると思う。特に住宅性能にはしつかりお金をかけることが必要」と長土居さんは語る。

また、同じ岩手県の北上市にいる畠山さんの親類の住宅が被害を受けたという、その写真を見せてもらった。地盤沈下で建物がV字型に傾いている。「おそらく断層の上に建てていたのでは」と畠山さん。同じ内陸部でも盛岡市より北上市のほうが住宅被害が出ているようだ。

大家さんは「年末に完成した住宅と地震発生前に完成した住宅は何ともなく、盛岡で他の人に聞いても、住宅被害は特になかった。被害に関しては沿岸部とのギャップがすごい。沿岸部はまちそのものがなくなりましたが、自然の力にかかれば人間が作ったものはすぐに壊されてしまうと感じた。しかし長い目で見た時、それを抜きにして人命を守る住宅を造るための手法・材料を選んでいくか、という見極めをしつかりたい」と話す。(2面に続く)



地盤が沈下してV字型に傾いた岩手県北上市の住宅(D・LIFE畠山社長提供)